

## 家庭科教育における教科理論と研究課題(II)

Recent Problems of Curriculum in Home Economics Education (II)

赤松 純子

Junko AKAMATSU

### はじめに

和歌山大学教育学部附属教育実践センター及び教科教育担当者による、教科教育に関する研究プロジェクトにおいて、これまでに、以下に示す3つの報告を行ってきた。

1. 家庭科教育の成立課程をたどることによって、最近の教科再編の動きの中で必要となってきた家庭科の教科理論と課題研究の手がかりを得ようとした。家庭科教育の抱える問題点と、4つの家庭科教育構想、背景学問と家庭科教育の関わりの問題点を報告した。<sup>1)</sup>
2. 1995年3月には、1994年度文部省研究開発学校における「総合性の理念を生かした教育課程開発」から環境プロジェクトの内容<sup>2)</sup>を紹介し、さらに、共同研究中の「家庭科を中心とした総合授業：水」の授業構想・授業年間計画<sup>3)</sup>及び小学校から高等学校までの内容<sup>4)</sup>の骨子を紹介することによって、基礎－水問題解決の原理－を理解させれば将来に生かせる家庭科となる授業提案を報告した。小学校の具体的なワークシートは、その後発表した。<sup>5)</sup>
3. 1996年1月には、1995年度の研究テーマ「よい授業とは何か」について、家庭科の教材構成について論じた2冊<sup>6) 7)</sup>を紹介した上で、授業づくりの視点からみた「家庭科を中心とした総合授業：水」<sup>3) 8)</sup>について報告した。

本報告は、2、3を中心とした、家庭科教育内容の編成に関わる提案である。

### 最近の教育界の関心事と総合性の理念

戦前の教育は、柴田の言葉をかりると、例えば学校段階において、教えるべき一定量の知識があるとして、学習者の能力・関心の違いを軽視し、詰め込み主義・画一主義と批判された。戦後の教育は、児童中心主義－地域や子どもの興味関心の実態調査－にもとづく生活経験主義、その反動としての教科の系統性重視、学問中心の教育課程と推移した<sup>9)</sup>。その結果落ちこぼしの出現、1989年度からは、新たな社会に対応できる個性支援を模索している。また、週5日制学校に対応した総授業時間の削減のために、これまでの教科を再編しようとする動きがみられる。その時には、これまでの教科内容の中から基礎基本は何かと精選するだけでなく、時代の必要性から追加された理念・内容・方法も視野にいれなければならない。

家庭科では、消費者教育・環境教育がそれにあたる。現在及び将来の生活課題を解決する

には、その時（その場限り）の家庭内に限定した課題解決だけではなく、たえず社会との関わりの中で家庭における生活課題を考える必要がでてきたことをふまえ、（これまではなかった新たな問題状況に気づかせ、諸要因の解説をする事ではなく）問題が発生した原理を明らかにし将来にも通用する有効な対応のしかたの基本を理解させることが必要である。その理由は、身の回りの小さな範囲では善と判断される事が、地球規模で考えたり長期的に見た場合に善とはならない、社会発展をかえって阻害する要因となることもあるからである。（具体的な授業については、現在共同研究・発表中である。<sup>3) 4) 5) 8)</sup>

このような状況の中で、登場しようとしている教科の枠をはずした「環境に関わる授業」を、小学校については「総合学習」<sup>2)</sup>—資料1に部分転載した—、中学校については、再編教科「生活文化科」<sup>10)</sup>を例に、総合性の提案を読む。いずれの提案も、1998年告示学習指導要領にのっとり、学力の基本を、自ら学ぶ意欲、思考力・判断力・表現力等の能力としている。

—小学校「総合学習」<sup>2)</sup>— 資料1を参照

1992年度から研究が始まった提案。

- ・教科構成論にあるように、総合学習は生活科のように領域概念であり、機能概念であるにとらえ、体験性を重視する。
- ・〈生活＝学習〉の総合性の理念を、より具体化する3つの視点としては、環境・人間・表現を設定。
- ・環境の学習対象を動植物、水、土、砂、空気、地球、宇宙、社会のしくみ、郷土のくらし、公害、環境保全」（既存教科内容では、理科は自然・社会科は社会・家庭科はくらし）
- ・〈自己活動＝自己評価〉の評価基準は、課題解決過程の観察とその内面を観察する事。4つの観点「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」を設定。

### くらしと環境のかかわりをどう読むか

くらしの問題の中でも、特に水に関わった授業内容を、資料1と資料2を対照して読み比べる。

資料1 1994年度文部省研究開発学校における「総合性の理念を生かした教育課程開発」から発達系列〈環境〉プロジェクトの内容<sup>2)</sup>

資料2 共同研究中の「家庭科を中心とした総合授業：水」の授業構想・授業年間計画<sup>3)</sup>及び小学校から高等学校までの到達目標と系統性<sup>5)</sup>

## (資料1)

## 2 &lt;生活=学習&gt;の総合性の理念を具現化する教育課程

もともと近代学校の教育課程は、近代社会において必要とされる外在的な教育文化財の保存と分配を第一義とする累積的な履修を前提とする性格をもち、結果として断片的な知識や技能の量的拡大と、生活事象と学習事象の分節化・分極化を惹き起こしたのである。このような背景には、<主観-客観>の二元論に立つ客観的認識を重視し、部分の総和は全体になるという要素還元主義に立つ近代的なパラダイムがあったのである。だからこそ、教育の機能分化による教科教育を自己完結すれば、全体としての人格の陶冶及び完成（これらの言葉自体が人間を操作の対象としてのモノ化している。）が図れるという仮説によって成立した、顕在的なカリキュラムが制度化したのである。確かに、このことは一面で明治以来の我が国の急速な近代化と戦後の高度経済成長を実質的に支えたのである。しかしながら、上述のような教育課程の編成・実施が、教えられることに主体的に従順になるという他律的で没個性的な存在へと子どもを追いやり、自律性の退化化・不能化現象を促進させてしまう潜在的（ヒドゥン）カリキュラムの機能を果たしてしまったのである。

そこで、本校ではこのような性格をもつ近代学校の教育課程から脱すべく、従来から<主観-客観>の二元論の閉塞性を克服する間主観的認識を重視する、ホリスティックな脱近代的なパラダイムを展望した教育課程の在り方を模索してきた。言い換えれば、実践的な蓄積を背景にもつ教育文化財を考慮した上での、学校文化の創造による人間形成を第一義とする非累積的な習得を前提とする性格をもつ教育課程であり、統合的な知識や技能の質的深化と、生活事象と学習事象の一体化・総合化を目指すものである。まさにそれは、「<生活=学習>の総合性の理念を具現化する教育課程」と表現できるのである。ただ、ここで誤解のないように付け加えて説明しておく、このような教育課程の編成・実施において教師側の主体性、つまり従前の教科教育研究の実践的成果を踏まえた支援内容を仮説することを拒否するものではない。つまり、子どもたちの生活世界における課題意識に基づく<生活=学習>の総合的な<自己活動=自己評価>の様態をとらえながら、現実的な必然性を尊重した教師支援をすることは、子どもたちの課題解決を保障するものであり、そこでの子どもと教師の相互主体的な関係の保持こそが実践者に問われるのである。したがって、このような考えは教育課程の編成・実施における羅生門的アプローチと言えるのであり、本校の教育課程の研究開発の基本的な考え方と言えるのである。

また、このことは<生活=学習>の考え方に立って、教科教育を中核とした学校の全ての教育活動の見直し、子ども本来の総合的な学びである<自己活動=自己評価>を保障する教育課程を開発することになるのである。

さらに、この教育課程の性格は、相関カリキュラムの発想を生かした新しい経験カリキュラムと言え、本校では生涯学習体系を志向して地域や家庭に開くとともに、幼・小・中の連携を考慮した小学校のオープン・カリキュラムの可能性を追究したいと考えているのである。そして、そのためには、近代的な教育観・学習観・子ども観などの転換が不可欠であり、全体として理念と実践及びその運用に一貫性のある教育課程の編成・実施が要請されるのである。

発達系列<環境>プロジェクト

	【 自 然 】	学習対象(素材)	【 社 会 】	学習対象(素材)
意味付け 根 拠	<p>この世界には、自分と同じように生命をもって生きている人、動物、植物などが存在する。また、それらの生命をはぐくみ育ててくれる自然環境が、存在している。それらに気付き、それらに心を配ったり、自然の神秘や不思議に目や心を向けたりすることは、「自己をひらき、ともに生きる子どもの育成」につながっていくことであると考え。</p> <p>自分とつながる生命体や自然物が増え、かわりが深まるにつれて、生命尊重の心が育ち、自然とうまく調和しながら生活していこうとする意欲が高まっていく。そうした学習を通して、自分の生活そのものをかえていくことが大切であると考え。</p>	<p>自然環境 ①生命をもつ存在として、生き物(動植物・微生物)、及びそれに伴う自然現象 ②生命をもたないすべての自然物、及びそれに伴う自然現象</p>	<p>自分の生活は自分一人では成り立たない。自分を支えてくれる人がまわりにたくさん存在し、お互いに支え合って生きていくための社会のしくみがある。それらのことに気付き、社会の一員として積極的に自分がどう生きるのかを考えていくことは「自己をひらき、ともに生きる子どもの育成」においては欠くことのできない視点である。</p>	
低 学 年	<p>○ 自分の生活の中で身近な生き物(動植物)に思いを寄せ、一体的にかかわる。また、それらの成長を期待しながら、継続して育てる。これらの活動を通して、身近な生き物に親しみ、自分と同じようにそれらの生命を大切にしようとする。</p> <p>○ 身近な自然物(水・土・光・風など)と、その快・不快の感触や移り変わる季節の中で変化する不思議などを感じながら、一体的にかかわる。そうした活動を通して、身近な自然物との触れ合いをこころよきと感じ、積極的に触れ合おうとする。</p>	<p>虫・魚 水 小動物 土 花・光 野菜 風 樹木</p> <p>移りかきわめる季節の中での体質の継続しみて育つる成長の長さのしくみ関係</p>	<p>学校や町など身近な社会との出会いによって直観的に課題を見付け、自分の思いやこだわりを大事にしながら、社会とかかわろうとする。</p> <p>結果として、社会についての認識が広がり、自己とのつながりに気付き、進んでかかわりをもとうとする。</p>	<p>学校たんけん 学校で働く人々 学校のまわりの様子 自宅のまわりの様子 町の様子、町で働く人々 公共の施設、乗り物の仕事</p>
中 学 年	<p>○ これまでの体験を生かして、身近な生き物の成長のしくみを考えながら、見直しをもってかかわる。また、自分を含めた生き物の共通点・相違点に気付き、生き物と環境との関係を考えながら大切に生命をはぐくもうとする。</p> <p>○ 身近な自然物を自分の生活に必要なものとしてとらえ、その性質やはたらきについて調べるとともに、自分の生活に取り入れ生かそうとする。</p>	<p>季節のちがいのなかで体質の継続しみて育つる成長の長さのしくみ関係</p>	<p>自分が生活する地域(松山市、愛媛県)や日本各地の様子、水、ごみ、地域の文化や開発などを見つめることで課題を見付け、自分とのかかわりを考えながら、環境や他者に意欲的にかかわろうとする。</p> <p>結果として、社会についての認識がさらに深まり、社会の一員としてかかわろうとする。</p>	<p>学校のまわりの様子 わたしたちの住んでいる所 わたしたちの市、商店の働き 愛媛県の自然・交通・産業 広がる上水道、ごみの始末 安全な暮らし、郷土を開く さまざまな土地の暮らし わたしたちの国土</p>
高 学 年	<p>○ これまでの体験を生かしながら、ミクロ的な視点をもって生息のためのいろいろな条件を考えながら、かかわる。また、マクロ的な視点で自分を含めた生き物の関係(生態系)をとらえながら、かかわる。それらの活動を通して、生命の誕生の神秘や生命の尊さを実感し、自他共に生命を大切にしようとする。</p> <p>○ マクロ的な(地球規模)視点をもって自然のしくみを考えながら、調べようとする。また、自然に対し畏敬の念をもち、生き物が生きていくためになくてはならないものとしてとらえ、自然とうまく調和しながら生活していこうとする。</p>	<p>育つる成長の長さのしくみ関係</p>	<p>様々な社会的現象とのかかわりの中で、自己とのずれを課題としてとらえ、それを解決する過程で自己と社会とのかかわりを問い直そうとする。</p> <p>結果として、社会についての認識がますます深まり、社会とのかかわりを広げ・深めていこうとする。</p>	<p>わたしたちの食生活と農業 わたしたちの生活と水産業 わたしたちの生活と工業 変わる国土 日本と世界 政治の働き</p>

※ 低・中・高学年の枠組み内…活動の様態として表現する。(評価基準のもとになるもの)

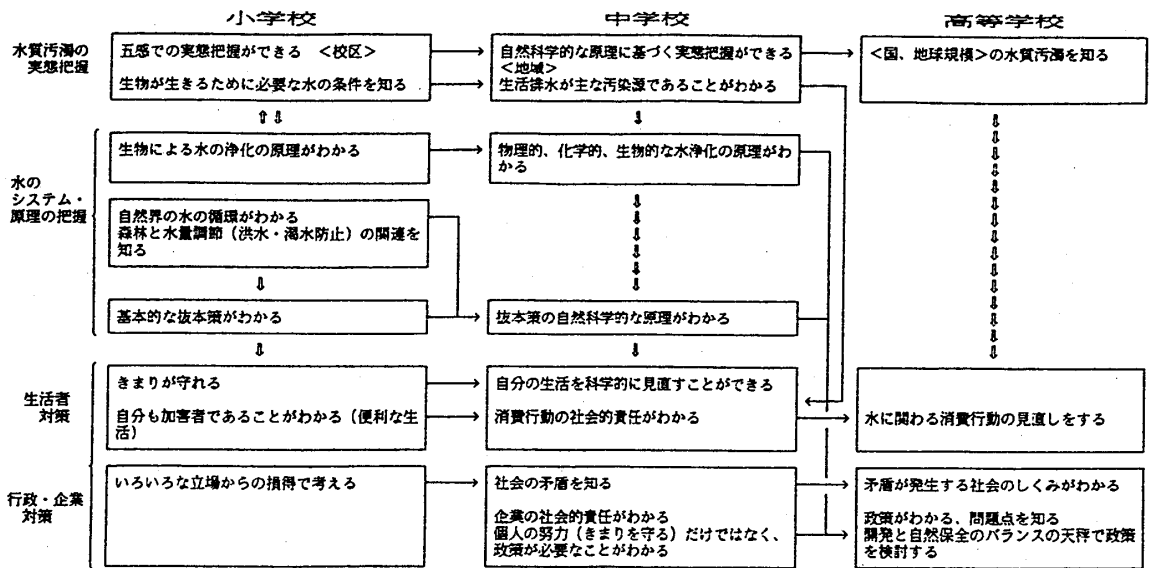
【くらし】	学習対象 (素材及び内容)	【自分】	学習対象(素材)
<p>自分が生きていく、日々の生活を送っていくということは、社会環境や自然環境とかかわっていくということであり、社会と自然との調和のなかに自分の生活が成立していくということである。また、社会と自然との調和は、自分自身が創り出していくものでもある。したがって、自分が社会環境や自然環境とともに生きる「一生活者」であるという自覚を持ち、自分自身のくらしを見つめ、そこに起こっている様々な問題点に気づき、よりよい生活の仕方を考え、創造し、実践する力を養うことは、「自己をひらき、ともに生きる児童の育成」につながると考える。そして社会環境、自然環境とのかかわりを自分の衣・食・住などの生活の仕方からどのように見つめ、改善し、創造、実践していくか、また、生活者としての自覚を持ち、自立していく力をどのように身につけていくかを見る視点は、環境とともに生きるよりよい生活を創造していくためには欠かせないものである。</p>		<p>・個性とは、「人が、その人なりの価値観や求める考えや行動を、社会的な場に、明晰に示すこと、つまり主体性をもつこと」である。 (『個性と教育』小学館より要約したもの) つまり、個性は、他者との関わりにおいて示されて、初めてその人の個性となるのである。自分の所属する集団の中で、自分としての考えをもって行動ができるとき、その人に主体性があると判断する。 さらに、「物の豊かさ」よりも「心の豊かさ」が求められる時代に、一人一人の心の充実が大切にされなければならない。そこで、自分を自分が意識し、「自分を見つめる自分」の教育が、集団の中に埋没しない創造的な生き方に繋がる重要な柱になってくる。</p>	<p>○個性 (自分らしさ) ○生き方</p>
<p>自分たちのくらしが季節とともに変化していることに気づき、環境と一体的にかかわり、体全体で季節を味わいながら生活しようとする。 身の周りの人々に支えられながらくらししている自分に気づき、家族や友達、先生とかかわりながら自分にできることを見つけ、実践してみようとする。</p>	<p>季節の変化とくらし (行事や遊び中心) 家族と自分 友達と自分 一日のくらし 自分でできること 基本的な生活習慣 など</p>	<p>○ 他者の存在に気づき、友達とのかかわりを次第に広げ深めていくこの時期に、自分や友達・家族のよさについて考え、違いを大切にしようとする。 ○ 好奇心旺盛で、強い意欲を示すこの時期に、家族の人の仕事について知る機会を持ち、実際にお手伝いできることを体験しながら、できる自分に気づく。</p>	<p>・ぼく・わたし・友達・家族のいい所 ・おうちの人の仕事 ・大きくなったら</p>
<p>自分たちの身の回りの生活の中から問題を見つけ、調査活動などの体験的活動を通して、問題の原因を探ったり、解決方法を考えたりしようとする。その中で、自分たちのくらし方が環境に影響を与えていることに気づき、自分たちにできることを実践しようとしたり、他者に呼びかけたりしようとしたりする。 身の周りの人と自分との関係を考えながら、日常生活の中で自分にできることや自分がしなければならないことを見つけ、進んで実践しようとする。</p>	<p>安全なくらし くらしと水 消費生活 (ごみの処理も含む) 簡単な衣食住のしかた 自分でできること</p>	<p>○ 他者とかかわりを強く意識し始め、集団での活動を好むようになり、客観性が芽生えるこの時期に、友達や学級集団のよさについて考え、自分にとって居心地のいい場所を作っていくようとする。 ○ 自分らしい在り方を模索し始めるこの時期に、地域の発展に尽くした人々の活動について調べ、今の私たちの生活とのつながりについて知ったり、自分史をまとめ10年後の自分について考えたりする。</p>	<p>・友達やクラスのいい所 ・地域の発展に尽くした人々の活動 ・10年後の自分</p>
<p>日常生活を見つめることによって、自分のくらしと環境との関係、環境とのかかわり方について考えながらよりよい生活を創造しようとする。 生活者としての自覚を持ち、協力して生活することの大切さに気づいたり、日常生活に必要な知識や技能を身につけながらよりよい生活をしようとする実践したりする</p>	<p>衣生活の工夫 健康を考えた食生活 健康で快適なくらし 消費生活(購入・活用・処理 といった一連の流れの中で) 明るい家庭づくり 男女参画型社会 など</p>	<p>○ 自他の差異を認め、よりよい人間関係を作り出すことに強い意欲を示すこの時期に、個性(自分らしさ)について考え、よさを伸ばそうとする。 ○ お年寄りや、障害をもった方、ボランティアなど、様々な人の生き方に学び、進路決定も含めて、自分の将来の夢に向かって努力しようとする。</p>	<p>・個性 (自分らしさ) ・様々な人の生き方 ・将来の夢</p>

家庭科教育における教科理論と研究課題(II)

(資料2)

小学校家庭科授業の年間計画*													
学年	1 学期						2 学期				3 学期		
	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	月	
第5学年	<学> (第1学年~) 鶏を飼う(土作り) → (卵を食べる) <学> (第4学年秋~) 菜種は出 種の種播入→収穫→油絞り(野菜炒め) <学> 葉菜・果菜・芋を植える → 収穫(野菜炒め)						<学> (遠足等) 椎の実拾い(おやつ) 取穫(芋のおやつ)				(土作り) <学>米作り(苗代) →		
	【被服】 羊の羊毛観察 春の蚕の飼育(動物園) 夏蚕の飼育(飼育) 絹の種播入 絹作りの観察 絹作りの観察						【被服】 綿収穫 → (糸を紡ぐ)				【被服】 たこ糸で編む 並縫い 玉結び 玉どめ 日本人は何を着てきたか		
第6学年	【家庭】 役割分担を見直す 男女はど個人差 家族のあり方 整理・整とん ムダな物の点検 【被服】 分類・収納 【住居】 部屋						【食物】 間食とは 間食のとり方 市販おやつの選び方・買い方 表示(食品添加物) 着色料検出 宣伝と購買欲 適量のおやつを考える				【被服】 生活に役立つ物の製作 古布で作る 74の台作り ごみの処理		
	【食物】 五大栄養素 基礎食品群 嗜好と味覚形成 卵・野菜・食用油・牛乳・肉 鮮度・品質の見分け方 買い方						【食物】 間食とは 間食のとり方 市販おやつの選び方・買い方 表示(食品添加物) 着色料検出 宣伝と購買欲 適量のおやつを考える				【被服】 生活に役立つ物の製作 古布で作る 74の台作り ごみの処理		

注)【家族の生活と住居】領域を【家庭】(家族の生活)と【住居】に分けて示す <学>は<学級活動>を示す



「総合授業：水」における小・中・高等学校の学習到達目標と系統性

資料1の、3つの柱（自然・社会・暮らし）の学年を追った理解の流れに、注目してみる。

水を浄化する微生物については、（自然・中学年）生き物の成長のしくみを知る→大切に  
にする→環境との関わりを知り、生活に生かす→（自然・高学年）自然のしくみを考えな  
がら関わる→調和して生活していこうとする

上下水道等の環境整備については、（社会・中学年）地域を見つめる→かかわる→（社  
会・高学年）→自己とのズレを課題とする→社会との関わりを問い直そうとする

暮らしについては、（暮らし 中学年）暮らしの問題を探る・解決方法を考える・くら  
し方が環境に影響を与えている事に気づく→（暮らし・高学年）→よりよい生活を創造す  
る

各々の発達系列の扱いとしては無理がないが、1人の子どもが同時期に受ける刺激・情報  
という点で考えると、具体的な実践においては、3つの柱の相互関連がわかるような、相  
当の工夫が必要になる。ここでの総合学習のポイントは、これらの相互関連をどう扱うか  
にあると思われる。最終的な授業モデル報告を期待したい。

資料2は、1学年で集中的に行う、水問題を考える時のキーワード（浄化・循環・水量  
調節・くらしかた）にそった授業構成である。詳細なワークシートは別報<sup>5)</sup>参照。

資料1との相違点は3つある。

1つは、浄化の主体である微生物に、徹底して着目していることにある。微生物が生きる  
しくみや条件がでてくることは同じであるが、扱う目的が違っている。上下水道の整備も、  
人間の水獲得の歴史及びその根本にある浄化のしくみ—微生物の重要性—ととらえ、さら  
に、自分の生活をどうするかと考える時にも、微生物とのつきあい方が基本としてでてく  
るのである。

2つ目は、資料1の総合学習の提案ではでてこなかった、森林の働き—水量調節—を加え  
ている事。くらしと自然を考えるとときに必要な観点である。

3つ目は、くらし方を考えるために、自然や社会・人間の行動の歴史を見ている点である。  
資料2では、何のために、何を、どう扱うかが明確なのである。

「総合化」は、何を目的として、誰が、いつ、どういう方法で、行うのであろうか。情  
報を得たり体験をした個々が自由に総合理解解釈するというのではなく、授業では、最初  
からしくんでいるものであり、そのための適切な方法・材料を、プロの教師が準備してお  
くものではないだろうか。それによって、興味・関心をもたせ、活動を支援する最強の武  
器になると考える。有効な知識・体験・理解であったかは、その後の生かされ方で判断で  
きる。これまで経験した事のない問題（この場合は水問題）が起きた時も、学んだ原理が  
適用でき、将来及び今どうすれば良いかがわかるようなものであったかが、家庭科的な視  
点では重要である。

——中学校「生活文化科」——<sup>10)</sup>

「生活文化科」は、技術・家庭科と保健体育の保健領域、社会と理科の一部を統合し、  
学校保健における生徒の実態も考慮にいれながら、創設されたものである。ねらいは、生  
活に必要な基礎的な知識の理解や技能の習得を通して、現代の生活を支えている科学的・

技術的・文化的な背景を理解させ、生涯にわたって明るく豊かな生活を営む基礎的な力を養うことである。ここでは、具体的な資料転載提示は行わないが、生活健康と生活技術の2つの分野に分けて、内容を構成している。では、くらしと水については、どう扱われているかを見る。

提示されている教材配列（発達段階に応じた）表では、次のように示されている。

いずれも、テーマー環境一での取り扱いである。

2 学年12－3 月	環境	身近なくらし
	住居の中で	水・空気・明るさ・廃棄物
	家庭の中で	家庭の働き・家族の役割
		・子供の立場から・親の立場から・男女の役割
3 学年9－3 月	環境	（選択学習）
	地域の中で	仙台市の環境問題
	世界の中で	自然開発と保全（開発と環境保護、南北問題）
		・地球規模の開発問題・地球とともに生きる人類

特に環境については、できるだけ多数の教科との関連を図り、いくつかの観点から授業を深めるような総合的な扱いをし、時間数も十分とる旨の扱い方の注意事項が示されている。

資料2との相違点は、たくさんの問題を扱う視点が明確に示されていない事にある。いろいろな環境問題の現状・原因を知っても、また、いろいろな角度からの検討が十分にできても、1つずつ別個の事柄であり、どれにも適用できるような考え方のポイントを学ぶ事にはならない。たくさん事例にあてればあたるほど、生徒は混乱し、授業時間も多く必要になるおそれがある。多くの事を学んだけれども、ではどうすればよいかかわからないつまり生きた力にならない可能性を秘めているのである。

## 家庭科の授業づくり

「よい授業」について論じた2冊<sup>6) 7)</sup>の本がある。山本紀久子氏は学ぶ力を支える要因とその教材の要件<sup>6)</sup>を示し、中屋紀子氏は「たしかに身につけ、しかも広がりのある物づくり」で教える方法を明らかにする<sup>7)</sup>ことを示している。

「学ぶ力」をもった児童の活動を支える3要因<sup>6)</sup>

問いを持続する力、問題解決的な力、定着している知識・技能

その教材の5要件と実例

意外性のある教材・・きな粉、ポップコーン・エプロンのラベルづくり

児童の発想を生かす教材・・意外な作品づくり

生き方を見つめる教材・・ふりかけづくり

原材料とその構成を求める教材・・繊維をよる

家庭科の基礎的能力が強化できる教材・・花ふきん

このように、物づくりと将来生きる力についての関わりは、少しずつ明確にされてきてい



る。それとともに、現在の生活問題を解決し、将来にも応用できるような基本的な考え方と確かめ方（自然科学的・社会科学の実験方法）を獲得できるような、真に役立つ学び、—それはすなわち、強いられない、自発性を促す学び（Study ではなく Learn）になる—を保証したいと考えている。本論文では、その一部を、「くらしと環境のかかわり」で述べた。「総合授業：水」に関しては、1995年度から3年間の文部省科学研究費一般研究（c）の結果に注目していただきたい。

## 参考文献

- 1) 赤松純子「家庭科教育における教科理論と研究課題（I）」、和歌山大学平成6年度カリキュラム改革調査経費報告書 教科再編・統合と教員養成、54-59頁、和歌山大学、1995年
- 2) 「平成6年度文部省研究開発学校 文部省実地調査提案資料」、愛媛大学教育学部附属小学校、1995年
- 3) 赤松純子「授業づくり」、柳昌子・甲斐純子編著 家庭科授業の創造、138-139頁、建帛社、1995年
- 4) 宇高順子・赤松純子「家庭科を中心とした総合授業：水」、家庭科教育、68巻9号、159-166頁、家政教育社、1994年
- 5) 宇高順子・赤松純子「家庭科を中心とした総合授業：水—小学校のワークシートの開発—」、家庭科教育実践研究誌 創刊号、43-68頁、日本家庭科教育学会四国地区会、1996年
- 6) 筑波大学附属小学校初等教育研究会・山本紀久子 学ぶ力を育てる授業づくり、11-14頁明治図書、1990年
- 7) 中屋紀子「家庭科」、現代教育問題シリーズ11 よい教材悪い教材、182頁、日本標準、1985年
- 8) 赤松純子・宇高順子、「環境問題解決方法の導き方」、家庭科教育69巻1号51-55頁、家政教育社、1995年
- 9) 柴田義松『教育課程』、放送大学教育振興会、放送大学教材1994  
柴田義松「教育課程研究の回顧と展望」『授業づくりの理論 2』、155-184頁、日本書籍、1994年
- 10) 宮城教育大学附属中学校  
1994年6月30日 第4回校内研究会配布資料  
1994年8月23日 第6回校内研究会配布資料  
1994年9月22日 中部地区研究開発協議会配布資料